

校長研修だより234

「話を聞く」について

2026・2・18 重枝 一郎

本年度から始まった「土曜授業廃止」は、やってみてどうだった？

経営の神様と言われるパナソニック創業者の松下幸之助氏は、私が生まれた年に日本で初めて完全週休2日制を導入した。この時の「1日は休養，1日は教養」という言葉が有名である。私は、土曜日について自由になることが大事だと思う。自分でその日に何をするかを決める。みなさんはこの1年を振り返ってどうだった？

さて、先日の職員会議で話したが、自分の話を聞いてくれる人の言葉なら、多少耳の痛い話でも聞こうと思うのが人である。心理学的には、「返報性の法則」と言って、自分がしてもらったことのお返しを相手にもしたくなるということである。相手の話を聞くという日頃の積み重ねは、肝心な時の対応の有効打として相手の心に響く。

学生の頃を思い出すと、友だちと話す時は、互いに話し手と聞き役を半々くらいするというのが暗黙のルールだったと思う。相手ばかりが一方向的に話して、自分は何も話せなかった時には、やはり不満が残る。

学院全体の話を理事長とする機会がある。もちろん私や木下事務部長と話すので、中高のことを聞かれる。その際理事長は、一方向的に理事長の立場で話すのではなく、私たちの話も聞く。私が言うのも何だが、素晴らしい人だと思う。

話を聞くというのは簡単に思われがちだが、実は我慢や気持ちの余裕が必要である。思う存分に言いたいことを伝えられた時は、おそらく相手が聞き上手なのである。さりげなくあいづちを打ってくれたり、会話の間を適度に持ってくれたりしている。

この適度な間には、実は心優しいスキルが必要である。逆に、話し手が次の言葉を発しようとした沈黙を待たずに質問をすると、話し手のリズムが崩れる。これを意識的に相手をやり込めようとするやり方にしたり、無意識的に自分が思ったことをすぐに言いたくなることを我慢せずに言ったり、無表情ですっと黙って話し手にストレスをかけた人がある。

昔、バーテンダーやスナックのママさんを見て、聞くスキルの高さに驚いたことがある。お客さんがしゃべりやすいように、さりげなく聞き流したり、タイミングよく微笑んだり、視線の動きも、目を合わせたり、合わせなかったりしている。

私が、話を聞くときのコツとして思っていることがある。それは「話の腰を折らない」「的外れな質問をしない」ということである。「話の腰を折らない」については、相手との距離やタイミングを図り、絶妙な間合いを考えながら聞く。もちろん出来る時もあるが、失敗する時もある。「的外れな質問をしない」については、余裕がなくて、ちゃんと聞いていない時や、不得手な話題の時に起こりがちである。そんな時は、何か言いたくなる気持ちを抑えて我慢してみる。そのうち相手が教えてくれる。

また、相手の話を楽しく聞く方法がある。それは、一緒に何かしながら会話するというものである。人と向かい合って話すのは意外と疲れる。何かしながらの場合は、気が楽になる。何かしながらなので、相手の言葉も待ちやすく、話すのも焦らなくなる。このシチュエーションはあくまでも失礼になる状況のことではない。

向かい合うと表情の影響は大きい。ずっとニコニコすることにエネルギーを使うかもしれない。でも何かしながら会話すると、視覚情報に邪魔されない分、意外と相手の話に集中できる。また、作業しながらなので、沈黙も許される。この手法は、私も生徒指導でよく使っていた。一緒に掃除をしながら、横で歩きながら等。ひざを突き合わせて話すのが難しい時はこれがいい。

この3学期中に、「目標管理シート」の「達成状況」を記入してください